

倶楽部-Kounotori



相談室設立と倶楽部-Kounotori発行にあたり

私は以前から多くの患者さん方から不妊治療において、相談のできる場所の必要性を聞いて参りました。治療は先の見えないトンネルと言われ、そのストレスは相当のものだと思われます。例えば先生から治療の説明をきちんと聞いたはずなのに実はあまりよくわかっていなかった時に困ったとか、治療中の切なさ、不安が誰にも言えず一人で抱えて苦しかったとか、ありのままの自分を受け止めてもらえる場所があればetc. そんな皆さんの声に少しでもお応えできるようにと、この3月にこのとり相談室がオープン致しました。

そして隔月ですがこの倶楽部-Kounotoriを通じて患者さん同士のコミュニケーションも図りながら、開かれた不妊治療・開かれた相談室として色々な情報を発信出来たらと思っています。相談室と倶楽部-Kounotoriは皆さんによって作られていくものだと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

HEART to HEART

相談室を開設し、様々な悩みや問題を抱えている方々とお会いしました。このコーナーは相談室でお聞きしたお話の中で、是非皆さんと共に考えたい事や分かち合いたい想いなどをお伝えし不妊治療について考えていきたいと思っています。

『仕事と治療の両立 看護師をしながら16年間治療を続けた私』

Yさんのご紹介

1955年生まれ47歳。結婚後1年で治療開始。看護の現場にいないら不妊治療を16年間行う。うち当院では6年。

不妊治療は信頼出来る医師、スタッフ、病院と出会う事がとても大事な事だと思っ

今私は47歳で17年前の30歳に結婚しました。結婚が遅かった事もあり早く子供が欲しいと思っていたのですが、すぐにはできず一年後に諏訪マタにお世話になりました。当時は院長先生がお一人でやられていて、検査の結果不妊治療が必要との結論により私達夫婦の不妊治療がスタートしたわけです。早速人工授精を試みたのですが成果はなく、その後地元の他施設で体外受精を始めた聞きそちらへ移りましたが、結局はさらに有名な都市部の病院へ行く事にしそこで3年間通院治療をしました。そこは全国的にもかなり評判の所では有りましたが、都市部まで通うという事の肉体的・金銭的負担に加えて、かなりの精神的重圧がありました。不妊治療を受けている者は人間の扱いをされなくとも何も文句は言っていけない、全てこなしていくための流れ作業なんですね。何か口に出そうものなら逆ギレされてしまう、そんな感じ。辛い辛い3年間でした。負担ばかりで何の成果もない治療だったので一旦は治療を辞める決心をしました。

しかしその後、諏訪マタに吉川先生が来られたと聞きすぐにこちらで再開する事にしたのです。初めて吉川先生にお目にかかった時に、この先生なら任せられる、もしここでやるだけのことをやって駄目ならば諦めようと思えました。不妊治療って自分の信頼出来る医師、スタッフ、病院と出会う事がとても大事な事だと思っんです。いかに信頼関係ができるか。あのまま都市部の病院に行っていたら今はきっとすごく後悔だったと思います。

	発行人: 吉川文彦 編集: こうのとり相談室 2003.6.1 Vol.1
--	---

諏訪マタでも最終目標はまだ達していないけれど、でも治療してきた長い日々、治療に携わってくれた多くの方々からの言葉や態度が、頑張ろうという力になっていました。ここでの体外受精の治療期間は6年間ですがそれ以前の10年間1回も反応がなかったのにここでやり始めて3回目でなんと、妊娠反応が出たんですね。そしてその後も2回反応が出て、うち1回は赤ちゃんの心拍が確認出来る所までいったんです。それは今まで治療をやってきて最高に幸せだと思えた出来事で、もしこのまま授からなくともあの思いを体験出来た事が支えになっていくと思います。30歳半ばでここに来ていたらきっと今頃はこの手に赤ちゃんを抱いていたかと、そんな事までも思います。

仕事と治療の両立で大切な事はオープンにする事、不妊の事実を隠さなかった

私は人を相手に役立つ仕事をしたいと看護師を志しずっと医療の現場におりました。患者さんが元気になっていく姿を見ることが自分にとってのやりがいや生きがいと感じたからです。病気になったら誰でも病院へ行き治療をうけていますよね。私も赤ちゃんをこの手に抱きたくて、主人に抱かせたくて病院へ行き治療を受けてきました。人の手を介して妊娠すると言う事が自然の摂理に反すると言う人もいるのですが、体外で受精、分割という過程はとりますが自分の胎内へ戻している訳ですから普通の妊娠と何ら変わりはない、私はそう捕らえています。何故赤ちゃんが欲しくて治療を受けるのに、隠してしなくてはならないのでしょうか、何故肩身の狭い思いをしなくてはならないのでしょうか。

私は何か聞かれた時は不妊治療をしていますと躊躇せず言ってきました。すると以外にも周りからの否定や非難の言葉は返って来ませんでした。もちろん周りの心ない言葉に傷ついてもう二度と言えないと感じてしまう方も多いこととは思います。しかしあえて、我が子をどうしてもこの手に抱きたい、夫に抱かせたい、そのために自分たちには治療が必要だと言うのなら、その願いにより周りの中傷は撥ね除けて欲しい、自信をもって治療を受けてもらいたいとも思うんですね。そんな一人一人の声が不妊治療への関心を高めもっと認証してもらえる事に繋がっていくように思います。普通に当たり前に治療を受けられる社会環境が一日も早くやって来ることをひたすら願い祈るしかありません。

治療の事を認知してもらってはいると言ってもやはり実際に現場では100%の理解があったかと言えばそうでも有りませんでした。でもそれは仕方がないことで自分が休めば当然他のスタッフに負担が行くわけで、解っていて休みをもらう事に対しての罪悪感はどうする事も出来ません。なので仕事に出ている時はひたすら周りに感謝の気持ちを持つと共に自分の出来る事は一生懸命頑張るようにしています。

それと私は自分が治療される立場になってみて改めて看護について、感じ、考え気づかされる事がとても多くて一つ一つが身につつまされておりました。それが自分の仕事に還元されていくのでそんな意味においても治療する事、働く事は切り離せない事だったかもしれません。

涙をのむのではなく、納得して治療の終わりに向かっていかれる自分達

仕事を持っている自分も大切にしてこれたし治療も精一杯出来る事をして来たと思います。実は私はこの6月をもって自分達の長い不妊治療生活にピリオドを打つつもりです。諦める勇気を持つ事、これも大事な事ですよ。しかし最後の最後までこのとりが飛んで来てくれる事を期待しています。そしてくしくもこの時期にこのとり相談室が開設された事は私にとっては大きな恵みです。オープンしてすぐに利用しましたが私の思いを一時間近くじっと受け止めてもらいました。心の迷路に迷い込んだ時こそこんな部屋は絶対に必要です。今の私にはこの存在はとても大切なものになっています。

最後になってしまいましたがどの様な状況においても私にとっては夫との関係が大切で夫が居たから今日までやってこれたとつくづく思っています。夫が私にしてきてくれた事を思うと、さて私はそれだけの事を夫に返してこれたのだろうかとも思います。夫婦として子供を作る目標に向かって頑張り続けた時間、そしてこれからの二人で向かい合って過ごしていく時間、共に私たちのかけがえのない人生です。お互いの思いやりや支え合いはやはり治療には絶対不可欠なものだと強く思っています。夫だからやってこれたかなと、思いますね。



ちょっとお茶でもいかがですか？
日頃皆さんの思っている事やつぶやきをのせていくコーナーです。
今回はお2人の方に原稿を寄せて頂きました。

❖ N・Hさん ❖

まずはじめに、このとり相談室の開設にあたり、患者として、このような相談室をつくって下さった諏訪マタニティークリニックの方々に感謝したいと思います。

私は不妊治療を始めて数年が経過しておりますが、その間本当にいろんなことがありました。検査や治療の一つ一つもそうですが、私のとなりに座った人、リカバリールームで一緒だった人、一緒に入院生活を送った人・・・赤ちゃんをこの手に抱くために頑張っている多くの人たちの喜びや悲しみ、そしてそれを支える先生方やスタッフのみなさんの姿から、多くのことを考えさせられました。

「不妊治療は先の見えないトンネル」と誰かが例えたそうですが、私はトンネルというよりは光と影の両方を丘の上から眺めている感じがします。治療の過程では、常に分岐点に立っているような気持ちでした。「検査の結果はよいのか悪いのか、次の治療は始められるのか。卵はできているのか、採卵できるのか、受精したのか、分割したのか、胚移植できたのか。そして・・・妊娠反応は出るのか。この妊娠は継続できるのか」はじめはプラス思考一色ですが、次第に逆のことも考えておいて、ショックを最小限にくい止めようと防衛する自分がいます。運よく一歩進めば、またどきどきしながら次の分岐点で立ち止まり、結果を待つ日々です。この手に私たち夫婦の赤ちゃんを抱きたいから自分たちで選んだ道ですが、気持ちや努力だけでは道はまっすぐにならず、治療を続ける限り、この分岐点に立ち続けなければなりません。頭では「期待しすぎず、力を抜いて楽に待とう」とわかっている、いつの間にか手に汗握り、つい、結果やその時の自分のことを考えてしまいます。

それに、治療をしているのも自分だけど、仕事をしているのもご飯作っているのも、玄関開けて義母にただいま～というのも自分です。治療で集中力を保っていた分、一連のことが終わり、気持ちの整理をして通常運転に戻るにも、それなりのエネルギーが必要でした。

判定の日、妊娠に至らなかったと告げられると、このとり外来のドアを閉めて、奥歯をかみしめ、今まで力を入れないようにしていたお腹に、今度は力を入れて廊下を歩きます。頭の中ではぼんやりと、「先生、申し訳なさそうだったなあ～。先生が悪いんじゃないのに」なんて考えながら。会計を済ませて外に出て、「そうだ。このあと仕事に戻るんだっけ。・・・でもこんな気分じゃなあ」カーステレオのボリュームを上げて大声で歌いながら帰ったり、突然諏訪湖のほとりに車を止めてジョギングコースを猛ダッシュしてみたり、友だちに電話してみたりして明るく笑える準備をしましたが、最後はいつも涙に変わりました。

今年3月の判定日は、会計を済ませるまでは同じでしたが、くると向きを変え、このとり相談室のドアをノックしました。するとスタッフの方がにこにこしながら、「どうぞ」と椅子をすすめてくれました。あたたかい雰囲気でした。初めて入る部屋なので、少しとまどいながら座りました。しかしそこに座った瞬間、勝手に涙が出てきてしまいました。「もう慣れたこと」と思っていたのに、力が抜けました。

それからは口からあふれる言葉を出すままに、それを決して遮らないでくれたので、どんどん出しました。判定結果は変わりませんが、玄関を出たときの気持ちは、いつもと違っていました。「一人じゃないんだ。家に帰っても、苦しいときはいつでも相談できる」と思うと、心が軽くなって周りの景色もよくみえました。それまでの、つらくても気持ちの部分は自分でなんとかしなければという壁がとれ、なかなか聞けないと思っていた治療に関する不安なことも、もっと力を抜いて聞けるということが、相談室を利用してわかりました。その日は心静かに車を走らせ、気持ちを切り替えて仕事に戻ることができました。

諏訪マタニティークリニックでは私を惜しみなく出して、喜びも悲しみも味わってきました。くねくね道をゆっくり歩く患者ですが、これからもどうぞよろしく願いいたします。

❖ S・Sさん ❖

私がこの病院を訪れたのはちょうど一年前、他の病院で不妊治療していましたが主治医の言葉にストレスを感じ、これでは、よけい子供が授からないと思い、この病院に通うことに決めました。今では、この病院に変えて本当によかったと思っています。不妊治療していると色々な悩みや分らない事が次々とでてきます。この先どうしたらいいのか？なぜそうなってしまったのか？夫婦で話し合っても結論のでないわからないことはたくさんあります。そんなとき、このとり相談室のドアをノックしました。最初は入ろうか？入らないか？ずいぶんと迷いましたがこれから先の治療に迷いがあって相談するとすぐに看護師さん呼んでくれて、体に負担がかかることや薬の副作用など細かく説明してもらい、胚について相談すると自分の担当だった培養士さん呼んでくれて、そのときの状況を詳しく納得するまで説明してくれました。「担当の人に聞くのが一番いいのよ」その対応に感激しました。この病院の先生やスタッフの方々のやさしさに触れて、先の見えない不妊治療に頑張っていけそうです。私にとってこのとり相談室は気持ちが楽になれるくつろぎのお部屋でした。もし心配事やわからないことがあったら、このとり相談室のドアを思い切ってノックしてみてください・・・。

